光

第五十八輯

大正十五年十月

◆一燈園生活について（三）……………西田天香
◆天香師の來布と布哇の日米人…………當山哲夫
◆昔の日記（二）……………………みのる生

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

◆藝術と生活……………………すゞき五ろう
◆一樹の蔭………………………青山白雲
◆不毛地…………………………松下吉衛

一燈園・宣光社

58

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戯三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尚自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一燈園生活について（三）

西田天香

三、理情不二

理情不二といふことに就いて。此話は、ちよつと危い、むづかしい事なので、私の氣持がよく現れるか、どうか。此生活に是非練らねばならぬ、大切なことであります。

實際問題として、チヨイ／＼聞くことですが、一燈園の生活では、結婚すると、やり難い、といふ事です。何故夫婦で托鉢生活がやり難いといふのか、問題であります。眞劍な人ならそんな事、ある筈がないのですが、これは、理と情と離れて、一つにならないからだとおもひます。

此處は死にゝ來たのだ、棄恩入無爲である、とは、理の上で、そうなければならぬのです。此生活をかなり永く續け、當番迄した人でも、手前の女房を持つと、其鋭い理に裁かれたら、といふ懸念の時、自分は女房と共に外へ避けたいやうになる。獨身の人でもそういふこともありますが、夫婦といふものは情味の深いもの故、情の滿足を得んとせば、棄恩入無爲に非ずとて、裁かれるに耐へられぬ氣がして、ヒヨツと、圈外に出ようとする、それを他から見る時、夫婦ではやり難いのかと思ふて了ふのです。同人の中でかうした前提があると、後から其道を踏んで行く人が亦、淋しい思ひをするの

です。

私は足らねば足らぬなりに衆の前へさらけ出して死ぬ迄行かうと思ふ。旨く理と情と不二にはなつてないかも知れませんが、行く積りであります。

理情不二とは何ぞや。

理と情と二つの反對のものが、一つになる筈がない、とおもはれませうが、扱ひ方でそれは一つであります。これを少し話して見たいと思ひます。もひとつ之を話したい、動機があります。それは離れに病人さんがねてゐられます。當番や世話する人が、理情不二を心得ねばならぬと感じられた事であります。人は皆それ〴〵異ひます。無病息災で死ぬ迄やる人、又それまでやれぬ人、患ひながらも徹底的に此生活を貫く人、どの人にも園では充分する氣持で、引き受け難いこと迄可成引受けもする、ひとつの飯を共に頂いたら、一日でも一日だけの同人である。不完全でも、一日托鉢すれば、一日の同人、病人をよそごとにしてはならぬ、又病氣はつらいもの、私はあまり患はぬので、同情が薄いようで濟まぬ氣持がしますが、しかし病氣のつらい事はしつてゐます、さうとて親類縁者のやうに撫でさすり、泣き悲しみて、唯人情にのみ落ち、いたづらに情を運ぶやうなことは、なんにもならぬ、ここは死にゝ來たのだから死んでもそれは當然だ、本來のところへ還へるのだ、といふ理一點張りでも亦、理にかたよつた淋しさを感じる。理にかたよらず、情に流れず、過ぎたるは、及ばざるが如しといふこともある、こゝがむづかしいところ。理情不二といふことを今晩、自分で反省して見たいと思ひます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

園の古い重な人が、園の爲、同人の爲に、鋭い注文を出されることがある、これはなければならぬ、園の生活に、骨を失はぬ注意である、けれども又、心配するのは、骨だけで、血を盛り、皮肉を付ることを、忘れはしないか、間違つた道を、敵とするなら、これと角力するとすれば、土俵で倒して、土俵の上で痛快振りをするのは、まことに見苦しい、靜に、砂をおとしてあげる心持がゆかしい。

こゝに來た人で、當番の前で、なまぬるいことを云ふた時、此所は死にゝ來た所だとも云はねばならぬが亦、出る時送つて出て別な氣持で少し話しませうといふ程の慰めも持ちたいものであります。それで亦、その事に、かゝはつて許りゐると、其人を生かす事が出來なくなる、情に落ちても理に墮ちても、甦ることは出來ないのであります。

手前の子供を、松王は、女房と相談して、管秀才の身替りに、源藏の所へ寺入さす。殺しにやるのである、みす〳〵殺しにやる。忠義といふ道理の前に、千代は、涙一滴こぼさず送りこむのである。こゝは理に徹してゐるところである。松王も平氣で、手前の子供が身がはりになつたかどうか、源藏がヒヨツと血迷ふて、忠義の堅い心をにぶらし、今、這入つて來た許りの、寺入の子を殺すにしのびず、若しや管秀才の首を、切りはせなんだか、と云はず語らず、どうぞ、自分の子の首を切れ、と祈る。源藏は、そんな事とは知らず、理三昧で殘酷にも、今しがた、送り届けられた、小太郎の首を切る。松王が、うろたへて、僞首といふなら、手はみせぬと、命がけである。松王は、首を取りあげて、自分の子の首に相違ない事を見とゞけて、ホツトする。玄蕃は、松王が管秀才の首にまがひなしといふをきいて、とく〳〵として、其首を持つて歸る、それからわたしの子供、お役に立てゝ下さつたか、

たづぬる手代の油斷見すまし、後から、切りかゝる、それと知つた千代は、寺入の時持つて來た經文庫で刀をさゝへて、管秀才のお身がはりお役に立てゝ下さつたかといふので、源藏は覺悟の前で身替りを提供した事をしる。折から松王も門口へ來て、安心せよ、子供はお役に立つたといふ。こゝまでは、双方理を徹して來てゐる、こゝから一變して深い情にはいつてゆく、そしてみんなが泣きつくす。

この泣く方面がなかつたら、芝居にならぬ、この泣く方面がもしなかつたら私はいやなものであるとおもふ、また初めから身替りも立てなかつたら芝居にならぬ、理をあくまでも立てゝ、そして泣く時、泣きたい時正直に泣く、こらへてくれと泣く、そこにふかい味ひが見られる、そのまゝ理も情もひとつだとおもふ、其泣ける人、そういふ泣き方をする人、子供を犧牲にまでして出す人である、犧牲の人であればこそ、あれだけの泣きかたが出來るのである。やがておそろしい因果は巡り來ると覺悟して、忠義の爲につらい思ひをする、子供まで其事をよく合點して、どんな死にかたをしたかと尋ねると、首さしのべて手を合せたといふ、覺悟を示してゐる、偉い親に偉い子供であつた。堅固な武士道にゐた親子故、今頃の行き方とは少しちがふけれど理情が不二で、おもしろい、理でゆく時も情でゆく時も緊張し切つてゐる、息もつかず見る芝居である、普通の泣き方ではない。愛にも二つある、ほんとの愛は、盲愛ではない、ほんとの情は盲情でない、情と一つにならぬ、とらはれた理ではならぬ、理とひとつにならぬ情にとらはれてはならぬ。圓頓の道には人情なしといふが、これほどあたゝかい言葉はないのである。

婆子燒菴といふ考案に、ひとりの婆が道心の僧を置いて世話をしてゐた、或る時、若い娘を抱きつかせた、僧は、こんなもの抱きついても、私がどうなるものか、「枯木寒巖により三冬暖氣なし」と云ひ放つて、少しも情に落ちないと強いことを示した、すると婆は、こんなもの世話をして、つまらぬ事をしたと、菴を燒て了ふたといふことがあります。しかしまた情味が起りすぎて、抱きついて、眠つて仕舞つてもまた菴を燒かれて了ふのである、不二といふことが何れにもかたよらぬ實に説明のむづかしいところであります。

こゝでは當番が、死にゝきたところであると、云ふて了ふては、枯木寒巖である。後へまはつて、しみ〲慰める事がなければならぬ、年々にその説明出來ない消息がジワ〲解つて行く事でありませう。とにかくよく腹を練らねばなりません。

私も誦經の前に、坐る、體がまがつてゐる時は、いろ〲の事にくつたくして、執はれてゐる、のび上る時、胸のこだはりがとれる、すが〲しくなる、いつの間にやら、無我に入る、無我になる時いつの間にやら身がのびる、顏の表情まで、固苦しいところがゆるむ、そして權威がある、こうゆう調子で、ぢつと、腹に力を入れて胸を伸す時理も情もひとつになり切る。こゝは死にゝ來たところである、とまで口へ出さいでも、説明になつてゐる。

南禪寺の毒湛は、ちよつと私の師匠だつたのですが、此人が南禪寺の山内を歩いてゐられる時、よく出逢ひますが、杖をついてゐて目禮する、笑ふでなし、怒つてゐるでなし、顏の表情が薄い、叱られてゐる氣もせぬが、よりつきにくい權威がある、或人が評して、二間程のところまで、引よせる

人で、それからは近づけぬ人だといひましたがよく穿つてゐるとおもふ、私が八人連で四國參りをした時、歸つて挨拶に行きましたら、毒湛老師が云はれるに、六十日位で歸るだらうと思ひ、無事を祈る爲、六十日お經を讀んだが、まだ歸らぬので、退屈して、お經をやめたと。丁度私は六十日でおまゐりはすんだのですが、そここゝで、求められるまゝに遊んでゐておそくなつた事をのべ御禮をいふた事ですが、なか〳〵情味もある人でした。それで向つては、勝手は云へぬ人でした、梅橋さんと私と、老師の片足づゝ揉みながらよく、トルストイが好きで話しては議論しました。老師は、何も云はず二人の議論をきゝながら、ニタ〳〵してゐられた、其ニタ〳〵が圓熟してゐて、今おもふとなつかしい。腹に力がはいると、顏の相までほごけてくる、しかしくだけではゐない。

これをこの生活に持つて來ると、よその事批評してはならぬ。よその狀態をみて、そのまゝよいと思ふてはならぬ。この生活との距離を、はつきり見ておかねばならぬがどんな事も責めてはならぬ、どうにもならぬでせう、私も其地位なら、同じことをするのでせう、といふやさしさがあれば、そのまゝ其氣持が、さきへ移るものでなつかしいものである、後へまはつて砂をおとしてあげる、ゆとりがいる。よく托鉢すると、おのづと托鉢心が他を裁かずなり、またちつとも妥協せず、さはりがなくなるのであります。口で批評せいでも、からだで批評してゐるやうな事もある、太秦の十輪院にゐた時、庭の横の二尺五寸巾の板の間にいて、机を置て書いたり、讀んだり、一服したりしてゐた。その頃、草履を穿いてゐましたが、まむきに揃へず、横にして上つたり下りたりしてゐました。某といふ同人が、そこへ來て手傳ひをしてくれてゐましたがその人は廣隆寺で寢る事になつてゐました。おやすみ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

といふて表へ出て戸を〆めかけてから、わざ〳〵その草履をまむきになおす爲に、又這入つて來る、私はその時だまつてゐましたが、あとで、次手ならよいが、それだけに、わざ〳〵直しに來るのは、少しやり過ぎると、いふた事があります。ちよつと性格が氣障なほうである、ちやんと脫いだら揃へて置かぬかといふことをからだで裁いてゐるやうに見えるのであります。

茶室へはいると、向ひの客と自分に出された、煙草盆の置き方が、さかさまになつてゐた、灰吹が右で火入が左ときまつてゐるのだそうです。茶席なぞでそんな事許り研究してゐる時、少しの不調法も目に立つ、お客側では、直すと主人を耻かしめる事になる、直さぬと主人が氣がついた時、バツが惡いと考へた上句、一人の客が、結構な煙草盆だと、事なく拜見して、次の客へ渡し其客が又拜見といふて、引取つた、そして目立たず直したといふ話、こんな事はまゝある事です。ちよつと、下駄を直すだけでもむづかしい物、いろ〳〵苦勞する程よくわかつて來ます。

孫子の兵學に、敵を知り、我を知る亦百戰百勝、と。

むこうの氣分を、のみ込み、自分を知る時調和がとれるのであります。

托鉢といふやうな、變つた事を行つてゐる、見ようでは、そのまゝが、かなりきざにも見える、かりそめにも托鉢者だといはぬ許りの顔付で腕を振る、どうか目に立たぬやう、しかし又、ちよつと、ざぶとんを出される、一度遠慮するのはよいが、幾度も幾度も斷るのは、かへつて失禮にもなる、彼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

を知り、我を知る百戰百勝、その中にも理と情がある、かうして變つた生活で立つてゐる、よく他を裁いてゐるやうに見える、キス〳〵した骨に肉を着せ、皮をきせ、肌さはりのよいやう、大死一番練り上げて、理情不二を體得して貰ひたいのであります。今晩私は離れの病人の傍にゐて、見させて貰ひます。一晩位の世話をせいでは私も心がおちつかぬ、さつき話をしたら、よろこんでくれたらしいが、病人に云ふた事です。血族の人が居てほしいと思ふでせうが盲愛に落ち入ると、かへつて苦しい、この人達が、立ちながら一句の挨拶も、生死を放れたものが通ふてゐる筈、ちよつとした世話が行き屆かいでも大きな世話をしてゐるかもしれぬ。私の弟の卯三郎がセキズイで六年床にゐたが、ほとんど、ほつたらかして置いた、ところが親類が來て、つらからう〳〵といはれると、つい、つり込まれて辛いやうに思ひ、いつまでも苦しい、それよりも靜に、なまんだーなまんだーで、生死放れてゐる時が有難い、情に落ちては、思ふても無益の事に氣がつかれ、取り戻すに骨が折れる、とよくいふてゐました。臨命終の時心顛倒せず心錯亂せず、心念を失はず、身心に諸の苦痛無く、身心快樂禪定に入るが如くと、生死を放れた氣持で、祈る時、安らかさを覺えるのであります。こんな事で園の人は、死に臨むも往きやすい。石原等さんも、そうであつた、また、傍で泣く人もない、工藤さんも、皆にまもられてやすらかに往つた、みんながふかく祈つてゐるだけであつた。

こんな話がある。ある人が、うんと金をためて、死ぬ程の患ひにかゝつた、まだ四十そこ〳〵、寺

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

參りもかつてせなんだがある偉い坊さんを呼んでお金ならなんぼうでも出すから命を延したい、醫者にかゝつてゐるが、なおしおらん、うまい物も喰べられん、どうやらあかんそうな、金ためて、これから費ふてたのしみせうと思ふ時、こんな事になつて、神も佛もないかと思ふ、金ならなんぼでも出すからなおしてくれないか。坊さんは、常に信心もせいで、死に際に命貰ひたいなぞ、あつかましいと思ふけれど、賤しい金持故、とあはれんで、金々云ふな、大事はお前の信心だよ、私の云ふ事を何でもきくか、と念を押して、命は五年延したらよいか。そんなにキッチリせいで最少し延してほしい、十年は、いけますまいか。坊さん、十年の十二月の卅日それでよいかと。すると、どうぞも少し延せてほしい、と金持。とう〱少しづゝ延して結局九十まで生きたいといふのです。坊さんは、九十の十二月の卅日に死ぬ事に仕様か、そのかはり、どんな事でも聞くか。ハイ聞きます。坊さんは、そんなら九十に今なつたとおもへと、云ひ放たれたそうです。これは、時間も空間もこえた、えらい說法である。九十迄生きのびて何になる、百年より眞面目な一年が大事である。キリストは三十で天國へ、カンペイサンも三十であつた。

信念をほんとに持つて、一日托鉢したら、それで死んでも成佛である。石原さんが死なれた時、當番が黒板の石原さんの札を、とつて仕舞はずに、かけかへて置かれた、石原さんは、あちらへ托鉢してゐられるからといふのをきいて、おもしろい事だと思ひました。何事も有難いと云ふのが長命であ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ります。愚痴るのは其心持が短命であります。私は今晩病人さんのところにゐますが少し書きものがあるので、も一人だれかにゐて貰ひます。看病する人は、泣き過ぎぬ樣、コセ〳〵した世話より、ぢつと祈るやう、みなさんも大切のからだですから、病氣が病氣ゆゑ、出來るだけは、注意もして、しかしむやみに恐れぬ樣、私も忙がしいので行き届かぬ勝ちであります。理情不二のお話もつきませんが、こんばんはこれで終ります。―大正一五、七、二三、於一燈園　天香師講話、筆記―

お金が、罪を造らずに入つて來てくれねば、受取らぬのである。金に血がつき、涙がつき、罪がつき、みす〳〵向うが困る樣なのは、私は貰ひたくないので、唯、金が入つて來さへすれば、よいとは思へぬのである。さりとて、私は、金が入らないのでもよいとは、よう言はぬ。有難い金なら、何ぼでも頂きたいのである。貰ふ時、御光のさす金がある。手が震へる金がある。說敎を聞くよりも、眞心の光を悟らせて貰ひ、その中に、道の御庇の輝いて居る金もあります。私の信心が冴えてくればくる程、私の身の持ち方が正しくなればなる程、淸淨な金が入つて來ると思ふ。私の體、私の信心は、金の入つてくる調べをする門である。若し間違つたものがあれば、入る門を塞ぐのである。若し人を助ける樣な金なら、喜んで受取り、祭るのである。それによつて、私自身が助けられ、救はれるのであります。――高橋正雄兄著「私の願」から――

天香師の來布と布哇の日米人

ホノルル　當山哲夫

大正十五年八月十六日黎明　天香師夫妻を乘せたる日本郵船太洋丸は、ホノルル港外三浬沖に停船して檢疫を待つ。私は午前五時起床。ポンチボールの寓居を出で布哇大學の近藤博士を伴ひ午前六時、第七號棧橋に赴き稅關ランチの出港を待つことにした。數日前稅關長夫人から特別パスを與へられたので、私共は檢疫官、移民官、稅關吏及び新聞記者と共に六時四十分港外行きを許されたわけである。今朝發刊の英字紙アドヴアタイザーは第一面に天香師來布の記事を掲げ、日本のソクラテス西田天香の文字が特別に眼をひく。而も其の記事が船中の移民官に驚異を與へつゝあるのも面白くなつかしく感じられる。

○

ホノルルの市街は夜の眠りからさめてダイヤモンド・ヘッドの上には既に旭日が上りつゝある。タンタラス山上より吹き下す朝風も涼しく空中高く聳え立つ『アロハ塔』も美しい。我等のランチは氣持ちよくエンヂンの音を立てゝ港外へ前進する。日本字新聞社から二人の記者が同乘無論今日の珍客天香師からインターヴユーを取るのが主なる目的である。五年前懺悔の生活が布哇に紹介されて以來、ご

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

れ位布哇の同胞は天香師を慕ふたであらう。日本から報道される色々の毀譽褒貶の中に一燈園と天香師は一面から云へば疑惑のうちにある。その疑惑の雲は未だに晴れて居ない。新聞の表面に眩惑されやすい今の社會では無理もない事だとは思ふが直接天香師を御招きする私には心配が多い。而も眼前に太洋丸を迎ふる私には一層責任感が湧かずには居られぬのだ。私は去る三月以來、その準備のために心を碎いた。普通の名士を迎ふるのと天香師を迎ふるのとは少し方法を代へねばならぬ。第一私自身から下座につかねばならぬ。そうだ天香師を布哇に招待する第一の目的は先づ私自身から救はれることにあるのだ。第二、行き詰りつゝある十三萬の同胞の生活を幾分なりとも整理されることを希ふ。第三、布哇の米國人を通ふして全米に一燈園精神を紹介するのが使命でなくてはならぬのだ。此の三ツの目的以外に師を布哇に迎へてはならぬ。私の決心は斯う確定してしまつても消極的に思はる天香師の一燈園生活が果して當地の内外人に受け入れられるものだらうかと、色々の取越し苦勞が起る。プログラムの事が氣になる。宗旨宗派の爭ひがはげしい當地の現狀と一燈園との關係を考へる。拜金主義に墮して居る人々との關係も考へずには居られぬやうだ。

○

太洋丸は直ぐ眼前によこたはつて居る。もう五分間もたつと私共のランチは太洋丸に着く。船客はデッキの上に集合しつゝ私共に視線を集中する。天香師夫妻の御姿は未だ發見されぬのだ。私は次ぎの瞬間から凡ては御光まかせだ、と腹を決定した。そして過去數年間に亘りて凡ゆる機會を利用して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一燈園を紹介した私の努力は決して酬ひられずに消えることはあるまい。よし私の輕卒な努力が誤つて居たにしても一燈園の御光は必ず同胞の精神に照り輝やかずには消へるまいと堅く信じつゝ檢疫を待つことにした。檢疫官と移民官は乘船した。私共と新聞記者は檢疫の終るまでランチの中で浪に搖られて居る。近藤菊次郎博士と日布時事の寫眞班椎木君は室内に入りて横になる。中村日布時事記者と浦田布哇報知記者は私と雜談を交はしつゝ太洋丸のマストに注意して居る。マストの方に檢疫旗が上つてゐる間は、檢疫が濟まぬわけである。それが下ると始めて私共は公然乘船が許されるのである。かれこれ一時間位して檢疫旗は下された。いよ〳〵太洋丸に乘船となると私の胸は師に會ふなつかしさで高潮を打つ。京都丸太町の杉本氏方で面會を許されてから五年になる。其の御顏さへハツキリせぬやうだが、特に勝淳氏の御顏になると茫然として記憶が薄い。保太郎氏の顏、相さんの顏と同樣ボンヤリとして記憶を呼び起こすに困難である。

○

私は急いで天香師のルームを訪ねて行つた。けれどもルームは空あきで誰も居られぬ。船員に訊くと今、スモキングルームで移民官の尋問中だと云はれ大急ぎでスモキングルームへと行く。ソコに私は五年振りに托鉢衣の師を發見したのである。師と勝淳さんは今しも田島君の通譯で移民官の質問を受けられる所であつた。私は近藤博士と新聞記者を伴ひ暫らく室外で師を待受け、證査が終るのを待ちて師に挨拶を交はし更に近藤博士と新聞記者に紹介した。師は麻の黑衣に靴をはかれ勝淳さんは白

の浴衣をまとはれ御兩人共に極めて元氣の御顏であつた。聞けば横濱出帆以來、講演に托鉢に或時は三等室でボーイさんになられて托鉢なされた由、船員船客一同から私にまで禮を言はれ、何とも云へぬ有り難い心持ちになつた。

師夫妻は先づ日布時事社の寫眞班のレンズの中に這入られてから兩新聞記者の質問を受け簡單なステートメントを手渡して一燈園の生活と今回の外遊の使命を告げた。そうする中に太洋丸は悠々とホノルル港内に着いた。船が着く頃、師夫妻と私共は食堂に入り朝食を攝ることにしたが夕刊英字紙スターブレチン記者ケース君が這入つて來たので師は近藤博士の通譯で彼の質問に答へられ、それが濟むとケース記者は師夫妻をデツキに案內してレンズの中に入れた。ソコには旣に金光敎の片島文學士と西本願寺開敎使田坂政聞氏が來訪せられ、簡單な談話を交はすと同時に直ぐ上陸せられたのである。

○

第七號棧橋には今朝七時頃より實業之布哇社員、サンデー家庭會員、土曜學校生徒を始め黎明敎會員高橋ドクトル、比嘉牧師、東本願寺深奥澤井兩開敎師、眞言宗龜山監督夫人等が一刻千秋の思ひで師の上陸を待ち受けて居られた。今しも師夫妻の托鉢衣の御姿を見るや一團の人々は宛がら慈父に會ふ心持で師を迎へ、子供達の手からは幾つとなくレイ(カナカ婦人の造つた樹の實や花の輪)が捧げられた。師は合掌の儘之を受け、高橋ドクトルの自動車でポンチボールの麓マゼラン街の住宅へと投宿されたのであつた。私と片島文學士は稅關の荷物の檢査が終るのを待ち午前十時半に至りて歸宅した

のである、が宅には多くの人々が師を取り卷いて色々の雜談が交はされ十二時になつて布哇初めての晝食を皆と共に取られることになつた。

○

午後一時よりアドヴアタイザーの女記者が師を訪問して來た。二十二三の若い婦人である。女記者は近藤博士の通譯を通ふしてインターヴユーを取るつもりであるが質問のポイントを經濟問題に持つて行くので師の解答を了解せぬ憾みがあつた。布哇に殘された現實の問題――たとへばサンバーク牧場でバターを製造して大陸と濠洲より入り來るバターを防止したいと思ふがそれについてよき方法なきやとの問ひに對して師の答へは布哇に居る間自然その問題にも觸れて行くかも知れぬとの意味で回答されたやうであるが若き女記者にはそれが解らなかつたのである。そして八月二十三日の新聞には全然賀川豐彦氏と混同した記事を發表して了つたのである。然し此記事は九月六日の同紙上、アーヴイン記者の手によつて都合よく訂正された。

女記者が去ると師は高橋ドクトルの自動車で比嘉牧師當山大西兩夫人同伴ヌアヌバレーからマノアプナホーの景色を見物しイワキキビーチを經て午後五時頃歸宅された。當日の日布時事は社說を掲げて天香師を歡迎し更に三面には師夫婦のカットを掲げて三段に亘る記事を載せ布哇報知も三面に三段のインターヴユーを發表した。スターブレチン紙は第一面にカット入りで大々的に報道し翌朝のアドヴアタイザーも日本精神界の指導者西田天香師の題下で紹介した。ホノルルは日本人と云はず米人と

云はず凡ゆる人種が天香師の話で持ち切り、不思議なる一燈園生活に對して驚異の眼を張つたのである。

○

上陸當夜は午後七時半よりサンデー家庭會主催の歡迎會が開かれた。最初の計畫は一般在留民の歡迎會をヤングホテルで開く筈であつたが、天香師の御手紙で御祭り騷ぎを好まれぬとのことで、とう〳〵家庭會で催すことにしたのである。出席者は室內からケチン及びヴェランダー溢れ男女子供の區別なくぎつしり詰め込んだ。高橋、比嘉、藤原、大西(夫人)諸氏の歡迎の言葉と土曜學校生徒の奉迎歌があつた後に師は約一時間に亘りて感想を述べられ引續き茶話會に移つたのであるが、出席者は午後十時半に至るまで退出せず色々の懇談を遂げつゝ一夜を送つたのである。ことに心强く感じたことは十日間三千二百浬の長途の航海を經られたにも拘らず少しも御疲勞を感ぜられなかつた一事である。私は當夜ヤレ〳〵と初めて安心が出來た。そして私の狹きルームに第一日の夢を結ばれたのである。師の寢室は三年前、賀川氏が一週日宿られた所、思へば何處までも惠まれた感謝の日であらう。

○

翌日は兩新聞社、帝國總領事館、實業之布哇社、高桑、毛利兩氏を始めマキキ日本人墓地、近藤博士宅に敬意を表され、夜は高橋ドクトルの招待を受けて日本人醫會、日本人病院看護婦數十名に對し

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

て座談的に講話をされ翌十八日は病院の托鉢に出掛けられた。そして勝淳さんと大西夫人とは病院に止まり私は近藤博士夫妻（夫人は米國人）と共に師を案内してファリントン知事、汎太平洋同盟、兩英字新聞社を訪ひ午後四時より堀牧師宅の托鉢によばれた。茲に不思議な事が現はれた。それは堀牧師の寫眞帳の中から十五歳の頃の天香師が發見されたことである。主客兩人の心は俄かに緊張し出席者一同も不思議な奇遇に驚かされた。堀牧師が同志社を出て初めて長濱に處女傳道をやられた時、師は米人より英語の初歩を學ばれた關係上茲に寫眞になつて現はれて來たものである。四十年前の人々が布哇三界で再會するとは神の外何人も夢想だにせぬことである。不思議な巡り合せもあつたものだ。

○

八月十九日の正午は國際青年會木曜午餐會の招待を受けて約三十分間の講話、夜は布哇第一回の公開講演會が傳道記念館に於て開かれた。講演會は實業布哇社主催堀牧師司會の下に七時半より始まり十時半に終つたが聽衆堂内に溢れる盛況であつた。其翌日は高橋ドクトルの司會で國際青年會、二十一日は今村惠猛師の司會で佛教青年會で開催された。第一日は一燈園生活の現在、第二日は一燈園生活の發生、最後の夜は一燈園と宣光社との關係に就て語られた、そして八月二十二日よりは個人及び有志團體の依賴を受けて托鉢講演に從事せられ三十日まで大小十七回の講演を試みられ三十日夜ラナイ島に出發、高橋ドクトル及び合息と湧川さんが同伴された。出帆前の正午にはヤングホテル樓上六階に於て初めて米人對手の講演があつた。主催者は汎太平洋同盟、司會は中央基督青年會主事ルー

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ミス氏が司どり初めてホノルル寄港中の大成丸船長淺利氏と支那人紳士が演説した後天香師は當日の主賓として約三十分の講話をなされた。出席者は一流の米人七八十名、それに日本人側からは桑島總領事を始め主なる紳士淑女が四五十名もあつた。師は黒川直也氏の通譯で先づ布哇に來た使命を語り次ぎに一燈園生活より世界の戰爭に論旨を進め、『私には敵は居ない、國と國との爭ひも人と人との爭ひも各人自ら懺悔する所に解決されて行く。若し私に敵があるならばそれは日本でもなく米國でもなく世の中の『惡』そのものであると斷言せられ、席上のアレキサンダー孃を指して布哇の米人で一燈園を訪ねた方は此方ぎりであると紹介し同じ席上の堀牧師を指して四十年前私に基督教を初めて教へて吳れたのは此方だと一同に紹介せられる所があつた。師の兩眼は清く澄み渡り態度は沈着き音聲は自然のまゝに水の如く流れた。約二百の聽衆は水を打つた如くに靜肅に謹聽しとくに『祈禱は勞働であり勞働は祈禱である』とのルーテルの言を引用して下座托鉢を說かれる所に行くと聽衆の襟は自ら正しくされるのを私は感じた。最後に師は支那製の烏毛の扇子を汎太平洋クラブに贈りフォード氏が之を披露すると割るゝが如き拍手の音が堂內を震動せしめるのであつた。

○

汎太平洋同盟の午餐會が終ると師は米人男女より引つ張り凧にされ、とう／＼バハイズムを信ずるミスアレキサンダーの宅に招待され午後四時まで茶話會が開かれた、アレキサンダー孃は往年一燈園に來られた方、マノア谷の夜の虹の出る神秘な宅に師夫妻を招きトッー博士夫妻、ミスフイシャー孃、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

英字記者アーヴィン氏、相賀日布時事社長夫人、池田日米投資會社長夫人及び私を合せて數時間の懇談が遂げられた。當日の談話は九月六日發刊のアドヴアタイザー紙の第一面より二面に亘り約三段の記事と寫眞版まで掲げて紹介された、（それは私より京都の回光社に一枚送つた）天香師來布以來米人の來訪を求むる者多く、米大陸より來布中の女天文學者ファネッス博士は師の島地よりの歸りを待ち受けて面會を求め相賀氏の宅で一時間半の會見を交換した位であつた。此の次ぎには當市センツラルユニオン敎會で一般米人の集會が開かれることになつてゐる。それは歸國中の原田博士の紹介によるのである。

縣知事との對話は人種問題と日米問題にも觸れたが內容は茲に發表を見合はすことにする。其外帝國總領事館を始め市內各所での講演は何れも聽衆に深き感動を與へたそして布哇の天地は目下天香師の話題が持ち切りになり同感と疑問の中にある。疑問の要點はいつもの通り『消極』と云ふのと『世界が皆一燈園になつたらどうするか？』との二つである。ところが到る處に御光は現はれホノルルにも他の島地にも托鉢へ飛込む者が段々と出來、馬哇島には既に光友會まで生れて天香師を再度招待することになつて居る。

師は八月三十日より九月十七日までラナイ馬哇布哇三島を巡講せられ十九日より二十八日まで加哇島の講演會に出席目下同島滯留中である。そして九月三十日より十五日間ホノルル市內の托鉢講演に從事せられ、十月中旬より再び馬哇布哇の兩島に招待されることになつて居る。今の所では米大陸への出發は十一月中旬か或は下旬と頃になるであらう。布哇の有志の中には一年或は三年間位、布哇に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

止めて置きたい希望もあるが、それは到底許されぬ事だと思ふ。要するに天香師の來布は布哇の內外人に意外の感動を與へたものであつてとくに他島より二度の招待まで受けると云ふ事は從來どんな名士の來布した時にも見られぬ驚くべき出來事だと思ふ。戰時中糖價一斤十五仙まで暴騰した夢の時代から急轉直下四仙臺に下落した現在の布哇が經濟上精神上どんなに苦悶して居るかと云ふ事實をハッキリ知ることが出來たのである。

私はペンを擱くに際して日本一燈園同人の健康を祈り一燈園生活が世界中心の問題となつて人類の生活に取り入れられるまでに徹底する日を望むものである。布哇は今秋に入り貿易風が不斷に吹きつゝある。ハイビスカスの花は燃ゆるが如く咲き亂れ椰子の梢に澄み渡る月光も詩的である。師は今、ガーデンアイランド（加哇島は一名花園島と稱す）に在りて多くの同胞に道を說きつゝ頗る健在である。合掌（九月廿四日）

秋田城介入道覺知、遁世して栂尾に栖みける比、自ら庭の薺を摘みて味噌水と云ふ物を結構して上人にまいらせたりしに、一口含み給ひて暫し左右を顧て、傍なる遣戶の緣に積りたるほこりを取り入れて食し給ひけり。大蓮房座席に候ひけるが、不審につく〴〵と守り奉りければ、餘りの氣味の能き候程にとぞ仰られける。——栂尾明惠上人傳記——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

昔の日記（二）

みのる生

五月十日（膳所にて）

自然と人間の生活、それ自身最も完全な書物である。思索と觀照とに、又眞善美を求めるのに、不適當な所はどこにもない筈だ。人間生活は祝福されてある。感謝。

十三日間の筆記生活は私には無理であつた。少し不眠の傾向がある。のぼせてゐる。

私はそれについて樣々に昨日から思ひ煩つてゐる。神經衰弱を恐れてゐる。心と生活とがおちつかない。私は神樣に一切を御任せし、神樣を信ずる時に極めておちついた氣持になる。

「汝等思ひ煩ひて其生命を寸刻も延べ得んや」

私は死を覺悟して今の生活に入つたのではないか。不眠位に動搖してはいけない。不幸の來ないことを誰が保證したのか。障碍に對して何故不幸を言ふのか。不平を言ふ權利があるのか。不平を言つて何か出來ると思ふのか。不平によつて最も尊き現在と、今の周圍を永久にけがし矢はうといふのか。單純にたゞ神さまを信じたい。

「凡てのもの我に善からざるなし。」

凡てそれ自身に善いといふものはなく、それ自身惡いものはない。只吾々がそう判斷し、そう名づけるのである。在るものは唯生きた現

實、流れゆく存在、思議を許さず、判斷と名とを超越してゐる。善惡等の價値は人間社會のこと、主觀のことであるようである。

善きは神のみ、信仰のみ。「義人は信仰によつて生くべし」「凡てのもの我に善からざるなし。」己が立つる律法と、小賢しい知惠――それは不信である。

「我等をキリストの愛より離れしむるは誰ぞ。患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危險か、劍か――凡てこれらの事のうちにありても、我等を愛し給ふ者に賴り勝ち得て餘あり」われ確く信ず。凡ては我等の主キリスト、イエスにある神の愛より我等を離れしむるを得ざることを。

五月十一日（膳所にて）

繪と音樂に美と喜びとを搜して行かう。創作の方面からではなく、味ふ方面から。それには金が要る。いや〳〵第一に必要なのは金ではない。要求の强さである。何でもいゝ。手近から求め尋ねて行かう。

詩もいゝなあ。だが多く望むは多く失ふことになるかも知れない。まあ待たう。

五月十三日（膳所にて）

神の御旨に從ふ時、キリストも釋迦もソクラテスも孔子も、さてはミケランヂエロも皆私と共に神にあつて兄弟である。

「誰にても神の御意を行ふ者は、是わが兄弟、わが姉妹、わが母なり。」

唯一筋に神の下にあれ。他との調和の如き、そこから生れる筈だ。人との平和のために、神に從ふを躊躇し、調和を己が知力にて持ち來さうとするならば、それは神を信じないのである。

人類生活の本道にあれ、常に。

私は人類の偉大さに常に謙遜でありたい。

敎へられることを願ふ者は、常に自らを卑くし、虛しくして居なければならない。自ら奢る者は延びることを得ない。自ら大なりとする者は、神、自然、人類の大を知ることが出來ない。

三人行有吾師

H君が赤城山上で馬鹿に魚を握むことゝ櫓を押すことを敎はつた話を私は思ひ出す。

三人行有吾師

謙遜なれ、謙遜なれ、眞實私達は小さいのであるから。事實を去つて眞實に歸れ。

見えざる者を信ぜよ。

「人その見る所のものをいかで復た疑はんや」見えないものなぞ信じられるかといふのか。見えないものだから信ずるのだ。神を信じ又人間を信ぜよ。事實を痛み、眞實を信ぜよ。肉の行爲を赦し、魂の善を信じ、そうして如何なる人をも愛したい。見ゆる所に躓く勿れ。見えざるものを信ぜよ。

京都へ行き夕方膳所へ歸る。

在園者。金川最勝、谷野信曉、相武次郎、伊藤祐之、小林古陵、中井靜湖、河村鼎、古川實、米窪千代土、李命錫、井上俊杲、岡田重尙、濱村愚庵、河崎源太郎、泗水淨信、森川禮二郞、金川民子、同園子、岩本光子。

五月十四日（膳所にて）

壁の腰をはつたり掃除をしたりする。食事に就いて下座を嚴守することにした。

下座を行じないと菩提心を頂けない。又殺氣を消すことができない。上座は報酬の味を持ち、又爭の對象であるから。

五月十五日（膳所にて）

積極的價値及び喜びがなくては、完全な人間生活と言へない。然し美や喜びも生活の Negative Bedingungen の上に立つのでなくては片輪

である。人間生活として一面的たるを免れない。

五月十六日（膳所にて）

許されて美を求め喜びを求めよう。

「出來ない。こんな亂暴なことができるものか」

よくそう考へる。然しこんな判斷は頭ででっち上げた偶像である。可能不可能は全力を出して當つて見て始めてる判ことだ。

天香さんの行つてゐる道は、十分には自分を滿足させないかも知れない。然しあんな風に眞身な相談をうけ、憂はしげな顏で來た人を笑顏で歸すことは、また自分の素願である。

五月十七日

夜、一燈園に歸らして貰ふ。夢ばかり見てゐた。此頃甘睡し得ない。

七月三十一日

一燈園の無一物、無欲になるため、暫く日記をやめてゐたが、天香さんの御許を得て再びつけることになつた。

神に許されゝば書き、許されなくなつたらいつ何ときでも喜んでやめねばならぬ。

昨夜から二階に寢させて頂くことになつた。又朝は五時に起きないでもいゝこと、不眠の翌日は奉仕を休むことを許された。

托鉢先、大德寺玉林院、御主人は胃ガン、子供が三人ゐて、下の二人は女である。上の女の子が尋常三年生である。脇の下の綻びた着物を着てゐたのは憐れであつた。澁谷さんは大阪へ住吉祭を觀に行つて居て、ゐなかつた。

宣光社と一燈園とが不二であることが氣がついた。私の信仰も、もう大丈夫な氣もする。そう思ふと實に有り難い。「信仰より出でゝ信仰に進ましむ」といふ言葉が判るやうな氣がす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

る。

淨財とは菩提心を起さしめた財をいふ。どういふ場合にうけ、どういふ場合に受けざるべきか。それは全體成就に障りあれば受けず、障りなくば受けるのである。そう思ふがあやまりであらうか。

八月一日

無托鉢、休養。

永遠の生活。信仰の生活は一時の興奮であつてはならない。そのピッチに於ても變ることなき生活でなくてはならない。神を信ずるものは急がない。悠々とどつしり腰を構へて、現在やつてゐる事が永遠にまで延びようとも平氣でやれるような態度で常に事に當らねばならぬ。

八月二日

托鉢先、大德寺玉林院。

戸田深雪さんが休養のために歸園された。

澁谷ふさ尾さんが住吉に行かれたのは奥さんのお件をしてゞあつた。私は玉林院には奥さんがないと思つたのも、澁谷さんが勝手に遊びに行つたと思つて不快に思つたのも速斷であつた。惡いことであつた。何とかしてあやまらねばならぬ。人を審くは惡の種子を蒔くこと、やめなくてはならない。

八月三日

興奮してゐる。托鉢先で爭ひ、相さんと爭ひ、岡田さんと爭ふ、困つたことだ。

「信仰の人は他人を審かない。如何なる惡を他人が犯しても、それを犯さねばならなくなつた事情に同情し、愛をもつて人に對する。」

岡田さんの言つた言葉は本當に私にはいゝ言葉だ。

今は我を捨つべき時。爭ふべき時ではない。無我、無言、無想、神と共に歩むべき時である。人間を視るべき時である。面壁九拜すべき時である。思ひあがつた自分の姿の醜さを耻ぢよ。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

藝術と生活

すゞき五ろう

人間の創る　藝術のみを
餘り重く　見過ぎるな、
自然の奏でる音樂
自然のえがく繪畫
たとえば　小川のせゝらぎでも
小鳥の歌でも　若葦のそよぎでも
または　明方　夕暮の
雲の色　かたち、
朝靄に　包まれた
貧民窟の　露路のながめ、
淸い月に　照された
波止場の　秋の夜更け、
何處にも
何時でも
自然を　ありのまゝに
直觀し得る者には
心の奧底の　琴線を
高鳴りさせれば止まぬ
ものがある、
こゝそこに
さきざきに
常に之を　感じ得る樣な
心を創る生活
それが一番大切だ。

悅ぶ大地

朝の氣は　さわやかだ、
昨日の雨に
打ちのめされた　大地は
ほのかに　息づいて居る、
未だ覺めきらぬ　町々を
さらさらさ　掃いて行けば、
新しい箒の　柔い觸覺に

眼を細くして　大地はほゝ笑む。
あゝ、あなたと　私の
秘かな悦びが
今朝もある。

自分よ

自分よ、
俺は　お前に
隨分大きな望みを
持つて居るよ。

本當のものを
もつと　はつきりと
摑んでお呉れ、
その爲には
殺すものは
すつかりと　殺し切つて、
生かすものを
伸び伸びと　生かしてお呉れ。

がつしりした肩で
大股に　一足づつしつかりと
大道を　歩いて行く
お前の　後姿を、
母の樣な心で
涙ぐみながら
俺は　何時でも
見て居るよ。

●**本號表紙題字**　は常陸潮來出島の長勝寺の古鐘の銘から頂きました●　寺は源頼朝の創建、銘は大鑑清拙禪師の作、鐘は關東三古鐘の一で國寶に編入せられてをります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一樹の蔭

青山白雲

時光遷流、無常迅速に、はつと驚ろいて、體中が眼になつたほどの驚ろきを人は感ぜぬものであらうか。

萬物の流轉する相は、永遠に瞬く一つの星に似てゐる、烏羽玉の夜を微に光りつゝ明滅してゐるのである。

夜に入つて、猶宿なく歩きつゞけてゐる時、暗い田んぼの中や、森の中に立ち止まつたまゝ、よく私は空の星を眺めるのである。

人の一生は過ぎ逝く影にすぎぬであらうか、さまよへるカインのやうに、地から地と歩いてゐる私のからだから、私の眼は脱け出して、星が一抔に散らばれる天界をさ迷ふのである。

實に長い〳〵間を私はさ迷ふてゐたことを覺える。

愛執、迷妄、惑業、のさま〴〵の業因縁が私をして此の世から彼の世へ、彼の世から此の世へ、生滅流轉させたのではなからうか。

願はくは、此の一生を終りとして、この惑業流轉の因縁をはたさせて貰ひたい。

此の世から己れの家と名くべきものを全くなくして、今日の己が身の在り所さへ解らぬ境涯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

に身をおいて托鉢して居れば、何事も、只そのまゝの不思議因縁、因縁不思議、と觀ぜられる。

一樹の蔭も一河の流れも、それは、一度は結ばれねばならぬものであつたことを覺えしめられる。

愛する者とも別れねばならぬ。
憎める者とも會はねばならぬ。
恩怨平等である。

或る人とは、路傍のかりそめの行きずりに、お互ひにその姿、面ざしさへも氣づくことなく別れて了ふほどの薄い縁もある。

或る人とは、生れた時から死ぬ時まで、即きもやらず離れもやらず、愛憎好惡しつゝ、縺れ合ひ、絡め合ひつゝ、生涯の葛籐を織りなさねばならぬ深い縁もある。

我執と愛慾は因縁の元を作る。

風に靡かされて觸れ合ふ木の葉ほどの薄い縁を、執着のために、解き難きまでに結びつけて了ふことがありはせぬであらうか。

業因縁は盲目的である。

彼女は己が行くべき一筋の道を、只一筋の縁の糸を索いて行くよりほかの道を知らぬのである。

誰もがそれを昧ますことも、脱れることも出來ない。

彼女のはたらきを、人は偶然的なものゝやうに思ふてゐるであらう、併し、それは必然的すぎるほど必然的なものである。

人生の經驗が複雜になるに從つて、次第に人は己れの意思と理性以上のものゝ存在を信ずる――尠くも、思ふやうになる。

意思と理性とだけで萬事解決出來ると思ふてゐる時、その時、人はまことは理性が眩まされてゐるのではなからうか。

誰でも己が過ぎた生活の跡を少しく省みたら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

よい。大方の場合、私達の生活は、意思し希望してゐたこのことの半にも達せず、豫期しなかつた結果におかれてある己れを見出すことであらう。

私は徒らに宿命を說くものではない。因緣に墮ちよと人に進めるものでもない。されど流轉する人間の生死には、此の因緣不思議力の强くはたらいてゐることを思はずに居られぬ。

宿命論者となつて因緣に卽するも誤りであらう。我見のみの自由意思を說いて、因緣を否定するも亦誤りではなからうか。

奈何に善しと見えやうとも、緣によつて來たものは緣によつて去り、緣によつて成りたるものは緣によつて壞れるのである、共に生滅流轉の業である。

托鉢は不來の相にして來り、不去の相にして去るものである。

因緣に落ちるべき此の肉身の我をして因緣に落ち切らしめよ。

巖頭より千仭の奈落の底に、粉微塵となるかもしれぬ。

それでよいではないか。

托鉢の祈りは、まづ己れ因緣に落ちて、自他の業因緣をはたすものである。

祈りそれさへも、嚴密に論じられては、惑業の種を植えるものとなりはせぬであらうか、一切衆生を佛にした上で、一番最後に成道しやうと立てられた菩薩方の悲願は最もである。

一切衆生は惑業の繫縛から解脫され、涅槃を得るであらう、されど、菩薩はその願によつて三界を輪廻するのである。

解脫の道を思ふ。

佛と佛とが只拜み合ふてゐる世界である。

（大正十五、七、廿三）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

不毛地

松下吉衞

どうしても責任上しなければならない仕事も、事情のゆるすかぎり、のばし〱していた。人にかわつてしてもらえることわ、もちろん、みな頼んでしまつた。彼れわ、今、何ものにもまして、おちついて考える時が與えられたかつた。此度こそ、考えに考えて、眞實、み救いの手にすがれる道につかせてもらいたいと願つた。

行(ぎよう)の大事なことわ、わかつている。信が得られゝば、必ず行にまであらわれるはずとわ思われるが、信お第二位においての行がどうゆうものであるかわ、彼れ自身のいたましい經驗で、知りすぎるくらい知つている現在の彼れである。信仰なしに、救いの心證なしに、今わ、一歩も半歩もふみだす氣になれないのである。立つている地盤があぶなかしいのだ、そこにそのまゝにしていてわ、何おしようにも、ぎつしり腰おすいてかゝれようがない。

それでわ、過去十幾年の奉仕生活わ、下座の作務わ、ことごとくが虛假(こけ)の雜行(ぞうぎよう)であつたか?

回想わ、彼れに、かぞえきれないほどの、なつかしい、かなしい場面、恥、悔、怒、恨おのこした事件のかず〱お、それからそれえと、よみがえらせた。…………

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

家おすて友にそむき、六つになつたばかりの一子おともなつて、洛東鹿ヶ谷の道場に身おゆだね、はじめて体験した托鉢修行、巷の托鉢おおえて、あの滴るような翠緑におゝわれた東山の上にかゝつている夕月お仰ぎながら、農家の火影のまばらな爪先あがりの路お、一歩々々ふみしめふみしめ道場さして歸つて行く時の充ち足りた心！「一日の勞苦わ一日にして足れり、明日のことお思い患うなかれ」の聖句およく口ずさんだものだが……Tさんも當時まだ四十おこえて間もない壯者でおわした、……そう〳〵同人にK兄がおられた、鹿ヶ谷の道場で同人と名のつく人と最初に言葉お交わしたのわ兄とであつた、兄とわよく話したものだな、托鉢と都おどりについて——向上の一路と經きたつた狹おゝい坂路お顧みながめる心についてなど——歸郷の折、七條驛に見送りお受けた時の兄の黒目がちな目なざしわ今も鹿ヶ谷生活の想出の種子である……道場の筧の水わ冷めたかつたな、冬の朝の雑巾がけでわ泣かされたものだ、また、地下室の食堂でとらせられた食事もずいぶんひどかつた、大抵わ朝から湯ずけで、味噌汁のないのが關東ものにわ殊にこたえた、托鉢先のそばやから供養になるだしこぶの鹽煮およく菜にいたゞいたものだ、麥七分のボロ〳〵めしなので子供が食卓についても最初どうしても箸おとろうとせずジイットこちらお見ておられたのにわ親として可なり切なさお覺えたつたが、今わその子もどうにか中學に通うまでになつている……それから歸郷しての行乞生活、むさい場所のふき掃除、洗濯、障子はり、下駄なおし、子守——およそ奴僕のする仕事とゆう仕事わいみきらいなく何でもしてあるいた、物見だかいペティブルジョアそろいの田舍の小都會のことだ、すぐ自分わ氣狂あつかえにされたものだ、二年ありわそのうわさが消えなかつたらしい、嘲笑と隨喜と、漫罵と信頼と、怨

嗟と共鳴との交錯したなかに、はじきれるばかりに力みかえつて、一點一劃もTさんの仰せにたがわざらんとした當時の姿わ、今想うてもほゝえましい……その時分、Tさんわ忙しいなかお都合つけてわ、汽車便のよくないところえ、よく來てくださつた、ある時わ、停車場で一列車おくらせただけで、せわしなく用談おすませてお別れしたようなこともあつた、ほんとうにTさんにわなみらぬお世話になつている、……歐洲戰亂後、社會改造の聲が天下にかまびすしくなつた時分、自己改造會の組織と運動とお、Tさんの主唱で計畫し自分がその綱領お草案したこともあつた、……機關紙の「光」わたしか自分が一番熱心な主張者で出ることになつたのだと記憶している、……「光明祈願」がN先生の手でつくられたのもその頃だつたか……「懺悔の生活」の刊行わほんとうに意想外な影響お社會におよぼしたものだ、印刷に附する前、この生活の內容おどうしたらさながらに傳えることができるか、あゝもこうもと、Tさんやﾈ先生などゝずいぶん氣おもんだものだが、あれから若い人達、男も女も鹿ヶ谷の道場さしてわずいぶん集まつてきたものだ、……それと前後して自分わ從來の出家道的な立場から在家の姿にもどつてきて、製造會社お設立したり、議員に選ばれて自治政に關與したりしたのだつたが、用心に用心わしたものゝあれが大へんな間違だつたらしい、自分のようなものにわまだなか〱世俗のことにかゝわれないはずだつたのだろうに、やつぱりうぬぼれていたので自分のありのまゝがわからなかつたのだ、名利の念、愛慾の妄動、道友はじめ既知未知の少なからぬ人々おどんなに傷つけたこ

とか、おわびのしようもない、……今かゝわつている社會事業にしても、この脈おひいていないとわいゝきれない、禍にあうのわむしろあたり前のことだ、自分のような不純きわまるものが、そこばくの親切心で何おやつたからとて事の成就しないのわ、具眼者から見れば、初めからわかりきつているのだろうに、さんざんひどい目にあわされぬいたのちの今、ようよう氣づかされたとわ、迂愚さ加減にもほどがある……これまでよく何かにつけてわ師友に對して少なからぬ不平不滿やら腹立たしさやらお覺えたが、迂愚きわまる自分に氣ずき、十餘年の修行にも浮ばれない亡者である身おさとらされた今わ、人おとやこう思うどころか、自分のみじめさで心わ一パイで、どうこの自分お始末したらよいか困りはてゝいるわけだ。

過去わ、十幾年の下座奉仕の生活わ——おそらくわ形だけのものだつたろうが——ことごとくが虚假の雜行であつたかどうかわ知らないが、その時〳〵にわ、やはりそうする外なかつたのだろう、自分としてわ、當然、經べき路すじお經て、あうはずのことにあつたのにすぎないのだろう……

こう考えて彼れわつくずく因果の理のおかしがたいことお感ぜずにいられなかつた。

誰おうらみようもない、むろん運がいゝのわるいのとゆう問題でもない。自分の蒔いた種子の當然なとりいれおさせられているまでのことにすぎない。自分が自分のありのまゝお知らなかつたのがよくないのだ。○博士わ良心お定義して人おして宇宙間に於ける占むべき位地につかしめるはたらきと

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

していることゆうが、自分も良心がにぶつていたゝめに正しい位についていなかつたのだ、これが最大の禍根だつたと、彼れわさとつた。

でわ、正しい位とわどこだろう、どうゆうくらしかたが現在の自分に一番ふさわしいのか？

彼れわ考えに考えた。師友の誰れ彼れに、むなしい心で、訴えもし、はかりもした。

子供五人もある四十男の年がいもない途方にくれた心お、あきれもせずにうけいれてくれ、覺者から見れば幼稚きわまる質問にも一々ねんごろな答えお吝しまない師友の厚情わ、たとえようもなく、勿體なく感じもし、また、それ〳〵の立場からいろ〳〵に教えてくれた言葉にわ、とうとい暗示がふくまれていることわわかつていても、なぜか、彼れの、今、求めてやまないものにピッタリとこないうらみがあつた。

二十六歳の秋—ちようどこの頃のような時候だつたろうか、小春日和のよくつずいた年だつた、—Tさんに初めてあうことが出來たのだが、當時のあのやるせない苦悶、喪心したような狀態にくらぶれば、年のせいとゆうものか、今なめさせられている惱みにわ、ある程度のおちつきがあるにわある。彼れわ、求めて與えられないいら〳〵しさお心の片隅におさえながらも、爲すはずのことわ、ともかくも、一日々々やつてきている。獨りいるとき、思いあまつてわ、ため息おつきもするが、人まえでわ、幾分生氣がぬけているように見える外、そう平生とちがつた態度お示さないでいる。それだけに、彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

れの此度の悩みわ、内攻しているとも見られる。はらつても〳〵幾重にもおゝいかぶさつてくる幕！もがけばもがくほど、からまりついて、しまいにわ、身うごきもならぬことになり、我れと苦悩おつのらせるにすぎないことわりお、經驗から敎えられているので、たゞじいつと忍受しているとゆうのが現在の彼れの姿である。

この幕お切つておとして、パツと明るみえ出させてもらえたら！　こうした奇蹟的な天啓にあうことお、時々わ、ひそかに、願わないでもないが、常識的であり、とかく理知にこだわる自分の性格お知つている彼れわ、望みおこうしたことにのみかけている氣にわ、もちろん、なれなかつた。

この貧しい愛、眞心のたらない自分に、何で、敵お、惡お、一切お、抱擁することができよう？現に自分が金錢のことで迷惑おかけられているSに對し、また仕事の上で妨げお受けたHに對し、たとえ惡意わもたないにしても、そのとつている態度に消極的な同情わ表せようとも、全部的に無條件に愛おもつて一つになりきれないでわないか、いや、何かの拍子で、そのことばかりにこだわり始めると、一ト思いに正義の刄できつてのけ、後わどうにでもなれ、といつたようなカツとした心もおこすでわないか。こうした自分に、一つの善行かとて、徹底的にわ、とても行じきれるものでわない。善行の功德によつて、初めて救われるとゆうのであつたら、自分などわ、いつまでたつても生涯かかつても、そうした惠みにあずかる願の、きかれようはずわあるまい。ひよつとすると、惡人正機お説

く眞宗の敎のようなのが、或わ自分ごときものゝよりすがるべき門かも知れぬ。

彼れわ、こう考えると、彼れの屬している敎團の歩みについて叮嚀な見方おしてくれているとゆう、その方でわ一人者のきこえの高いCさんのことが胸にうかんだ。そうだ、Cさんにあわせていただこう。こうきめると、彼れわ心の奥底にまだ殘つている若い血のおごるのおほのかに覺えた。

亡者のような自信のない足どりであらわれた彼れの姿わ、Cさんのあふるゝばかりな慈眼に、どんなにうつゝたことだろう。『……よいことおしようにも、すぐ名利の慾がでゝくる、無抵抗主義お徹底させようとしても、すぐいきずまる。吾々わこうゆう淺ましい人間なのである。この自覺わ、あなたも充分おもちになつていらつしある。そして惱んでいらつしあるのだが、もし、こゝに、こうゆう淺ましいものお、あわれんでくださつて、よいことおしようとしてもできないのお、それも無理わない、さぞつらいことだろうと、そのまゝお無條件に受けいれてくださる方があるとすれば、あなたわ、何おおいても、おすがりする氣におなりでしよう。そのお方が佛さまだ、あみださまだ。これわ釋尊が說きのこしていられ、法然聖人親鸞聖人はじめ、みなひとしく敎おたれていられるので、たゞもう信ずればよいのです。』

こうした敎說おくりかえし〳〵ねんごろにされても、理知でわかる事がらでわなし、機縁が熟さないのか、彼れにわピッタリしないふしがあつた。Cさんの法悅そのものお象徵したような顔かたちお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

拝み、その教えてあかない熱誠にわ動かされても、彼れの空洞のような心わ、Cさんにおうての後も前も、さしてかわらなかつた。

これと前後して、彼れわ、また、彼れのこの頃の様子お見て大へんうれいてくれてる一人の道友の紹介おうけて、篤信な天理教の人達にあわせてもらつた。その生き〳〵しい信仰の體驗にわ、たゞ〳〵頭がさがるばかりであるが、沙漠のような彼れの心に、たとえその種子がおろされようと、めばえる望みなどなさそうに彼れにわ思えた。

それ〳〵にみな信仰おめぐまれている、救いのみ手にふれている人がそちこちにあるのに、自分のようなものわ結局萬年亡者として一生終るべく運命ずけられているとゆうのだろうか？　こう考えると、彼れわ又なく寂しかつた。こうした寂しさお胸に藏しつゝも、日々の務めにいそしんでいく彼れの姿わ、彼れお知るものゝ目にわ、いたわしくさえうつゝた。

寂しさでわ、彼れわ、彼れの畏敬している社會運動の有能なある指導者およく想い出す。あゝやつて、半官半民的な機關にかゝわつて苦しい立場におかれながら、夜ひるのわかちなく働いており、その透徹した論理と緊張しきつた態度にわ、嚴粛な感じさえおこさしめるものがあるが、どこかに寂しさお宿していることわ、否定できない。最近あつたときも、『宗教のことわ、僕にわ、ほんとうにわからない。………星お見ていると、めいるようになってきて、人間のことなど、何もかも無意味に感せら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

れてしまつて、心があやしくみだれてくる。どうしようもない。僕わ宗教にわふれないようにしている。』と述懐していた。時々、酒おすごされるときいたが、やつぱり、寂しいんだろうな。……

彼れ自身が、つい最近まで、勞働者の政治運動に關係して、彼れが年來の主張である宗教的情操お基調とした社會運動の實現に、すて石となつてゞもつくしたいと思つていたのであるが、外部から知識的に見たのと、內部にはいつて實際にふれたのとでわ、非常な相違で、宗教と社會運動とお結びつける困難わ、油と水おませる比でないことがわかつたので、彼れわやむなく手おひくことにしたのだ。

社會組織わ、より合理的に改造されねばならない。この見解にわ、かわりようがないが、今の彼れとしてわ、社會運動に現實にはたらいている狂暴な生きんとする意慾の弊害にいたくうたれているので、個々の人の更生こそ何ものにもまして値打ずけられねばならないとなし、もし許されるなら、そうした仕事に專念かゝらせてもらいたいとの念願おいだくようになつているのである。

或わ無產階級解放の美名に自己欺瞞し、或わ文化人たる誇りに陶酔して、反社會的行動にいでるものが、この頃にわかに加つたのお見るにつけても、彼れのこの念願わいよ〳〵強まつていくのであるが、省みて、自分の無信仰、弱さ、不明お思うと、われとわが身のふがいなさに責められて、世に生きる理由さえ無みせずにいられなくなつてくる。

こうした自分お、誰が救つてくれるか？　こうした姿で人に接することわ、それ自らが罪でなけれ

ばならない。自分のようなものゝおるべき正しい位わどこか？………

秋晴の陽の下に、くる日も〳〵、彼れわ吐息おもらした。（十五年十月）

おさしず(天理教)

人間見ればわからん。

案じてわおそくなつてならん。

知らんから身に知らせある。

人間身の内、神の貸物。神に借物。

人間の心で定めた理わどうもつずかん

醫者わいらん藥はのむこといらんとゆうことわ教えにないで。

難儀さそう不自由さそうとゆう親わない。

何程どうしようと思うたところがどうもならん。

人間の心わどうもならん、人間の思う心でわ何にもならん。

心一つが我がの理。

人間とゆうわ今日までの日わわかるであろう、明日のことわわからうまい。

なんぼしようと思うてもならせん、又しようまいと思つてもなりて來るがこれ因緣。

心の理お働かすところ身の障りの台である。

人間心もつてするから、もつれ〳〵て持ちもさげもならんようになる。

人間心から見て曇ちよつとあれば底まで濁つたるとゆうと同じこと。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

黎明のさゝやき

西田天香著　代價30錢

近代文化と一燈園生活

〃　〃

一燈園生活問答

松下吉衞著　代價15錢

時代苦を苦しむ

〃　代價20錢

クリスト教社會主義史

〃　代價32錢

社會問題と宗教

中桐確太郎著　近刊

購讀申込所

回光社

京都市烏丸頭下總町五

振替 大阪 59839・東京 57671

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可（每月一回十五日發行）
大正十三年十一月三十日發行
「光」第五十八輯　代價貳拾錢

ホルムス氏原著・谷口雅春氏譯

第一篇　忽四版

如何にせば運命を支配し得るか

四六版總洋布綴三百數十頁　定價二圓

第二篇　最新刊

神と偕に生くる道

四六版背洋布綴三百數十頁　定價二圓

譯者の三部作『神を審判く』はその第一部を出したのみで未だに第二部が出ない。それは氏の心境が既に『神を審判く』時代を去つたからである。氏は今自己を『神と偕に生くる道』に見出したのだ。此の心境の推移を語るものは此のホルムスの二名著の飜譯である。『それは譯書であるけれども自分のどの著書よりも自分の現在の心境に近い。自分は此の書によつて救はれ、又此の書によつて他を救はんがためにそれを譯したのである』と。

（本書の反響の1）

◇本書を手にせる日より一日として讀まざる日なく精讀八回つひに境遇を一變致候（兵庫縣六甲村、石田醫學士）

◇在來教會と寺院とにのみ陣取れる宗教を實際生活に體現せる眞に生きた宗教と存候（橫濱千草園、本田氏）

◇私たちの衰へひがんだ心にも大なる光が與へられます。數年前に此の書を手にせしならばと愚痴さへも起ります（廣島縣安佐郡、藤本氏）

第一篇發行所　東京京橋南紺屋町（振替東京三二六）　實業之日本社

第二篇發行所　東京市京橋尾張町（振替東京五五三）　警醒社書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN